

連載「音楽とキャリア 人生 100 年時代に向けて」

第 9 回： コロナ・パンデミックでわかったこと

音楽学者 久保田慶一

連載「音楽とキャリア 人生 100 年時代に向けて」の第 1 回「リーマン・ショックと東日本大震災 音楽界に与えた影響」を掲載したのは、2019 年 4 月 25 日発行の Vol.8 であった。あれから 2 年近くの時間が経過したわけだが、我々にとってこの 2 年、とりわけ 2020 年という年は大きな変わり目の年となった。

第 1 回のテーマとした 2008 年のリーマン・ショックは、その後の世界の経済のみならず、人々の意識や活動の変化をもたらしたが、我々が 2020 年に経験したコロナ・パンデミックもおそらくリーマン・ショックよりももっと深刻な影響を及ぼす違いない。しかもこの原稿を書いている 2021 年 2 月にあっても、パンデミックがいつか終息する兆しがないのである。人類は未曾有の危機に遭遇しているといっても過言ではない。

コロナ・パンデミックによって私たちはこれまで経験したことのないことを、1 年という短い期間に経験した。コロナウイルスはすべての人に「平等に」襲うので、すべての人が「同じこと」を経験したわけだ。もちろんとらえ方は人さまざまだろうが、こうした経験がもたらす様々な影響や結果が、今後の日本の社会全体に、広く顕著になって現れるのは確かだろう。数年すれば、「コロナ・パンデミックが音楽界に与えた影響」と題した文章を書けるかもしれない。

この連載をはじめるとあって全 10 回のテーマを考えていたが、今回のこの連載を終えるにあたって、当初考えていた第 9 回と第 10 回の内容を第 7 回と第 8 回に集約させ、第 9 回と第 10 回は「コロナ・パンデミック」後の音楽界が直面する課題等を予想しつつ、現在の我々が直面している問題や課題について若干の考察を加えてみたいと思う。ちなみに、この原稿を執筆したのは、2021 年 2 月末日である。

1. 根源的な音楽活動としての合唱

現在今なお学校の音楽科授業では、合唱活動が制限されているのが心配である。合唱は児童・生徒の学校生活においてとても重要な役割を担っている。校歌を歌う、学校合唱コンクーでクラス一丸となって課題曲に取り組む、運動会で応援歌を歌う。子どもたちの心がひとつになるわけだ。多くの人間が同じ場所で、同時に、声を合わせる、つまり、息（ブレス）を合わせて、同じ言葉を歌う。日常生活には

ない「場」と「時間」である。まさしく「ハレ」の世界である。

息は「生き」に通じる。息を吹き込むは再生させることであり、息を引き取るは死ぬことである。ラテン語で「息」は「スピリトゥス spiritus」である。ここから「精神」を意味する英語の「スピリット spirit」という言葉も生まれた。精神を吹き込むことが、「インスピレーション inspiration」でもある。そして言葉には、人を動かす力があり、その力は霊的でもある。日本語でも昔から「言霊」という言葉もある。ルネサンスの画家フラ・アンジェリコの傑作に『受胎告知』という宗教画がある。天使ガブリエリがマリアにイエスを身ごもったことを伝える場面を描いたものだが、そこでは天使ガブリエリはマリアに「息」を吹きかけ、その「息」には受胎を伝える聖書の言葉が記されている。



F.アンジェリコ作『受胎告知』(1440年)

合唱では参加する人たちが、同じ場所で同じ時間に、「生きる」ことを共有するのである。そして同じ言葉を通して「霊的なつながり」を持つ。しかしコロナの感染予防で合唱が禁止されるとなると、合唱は同じ場所で同じ時間に、エアロゾルを通してウイルスを交換する場と時間になってしまったわけである。そうなるときわめて生物的な対応しかできないわけであるが、合唱とは本来、生きるための「生物的な」行動なのである。太古の昔、人々は狩に出る前に声を合わせて叫び、恐怖を打ち消し、獲物を得ては喜びを共有したからである。

2. 「ノリ・メ・タンゲレ(私に触れるな)」

コロナ・パンデミックに関連する書籍を読んでいて出会った、興味深い言葉がある。それは、「ノリ・メ・タンゲレ(私に触れるな) Noli me tangere」というラテン語の言葉である。社会学者の大澤真幸は『コロナ時代の哲学』の中でこのように述べている。「私たちは今、新型コロナウイルスの感染への予防として、繰り返し、同じことを言われる。他人との接触を避けなさい、と。人と人が接触することが最もよくないことだ、と。すると、新約聖書を読んできた者は、ほとんど条件反射のように、ひとつの句を連想せずにはいられないはずだ。『ノリ・メ・タンゲレ Noli me tangere』、『ヨハネによる福音書』二十章十七節にある、イエス一言である。」⁽¹⁾

イエスは十字架刑にかけられ3日後に復活したが、これは復活後にマグダラのマリアに言った言葉である。イエスはもはや人間が触れる存在ではないが、しかしすべての人のところにあるという意味である。大澤はこういう。「実際、私たちが、十分に物理的な距離をとるのは、触れ合うことが不可能なほどの距離をおくのは、互いに相手を気遣ったことである。」



A.ダ・コレッジョ作『ノリ・メ・タンゲレ』

(1495年)

コロナウイルスの恐ろしさは「不顕性感染」であるという。つまり、

症状が現れない感染である。だから自分が感染していてもわからないし、他人が感染してもわからない。マスクの着用は自分への感染を防ぐことはできないが、他人が感染することの予防になる。

しかし大澤が別の所で言うように、これまでのイエスは手をかざして病人を癒してきた。このことを考えると、触れるという前提があつての「触れないことの愛」があるとするなら、触れることを完全に排除してしまうことは、できないということなのだろうか。

合唱には「触れ合う」ことが必須である。声と声、息と息、心と心、これらが一体となることが合唱の魅力である。今しばらくはオンラインで声と声だけを合わせることで、かつての「触れ合い」を想像することができるが、そのうちに「ノリ・メ・タンゲレ」に耐えられなくなるにちがいないであろう。「触れない愛」と同時に、何かが失われてしまうのかに思いを馳せざるをえないのであろう。そのころには感染拡大が終息していることを願うばかりであろう。

こうしたことは合唱に限らず、大学で実施されている遠隔授業、特に音楽大学などでの実技にも言えることである。日本の多くの音楽大学が早々と感染防止対策を徹底して、実技指導を再開したのも、当然なのかもしれない。しかし筆者の知人であるボストンのパークリー音楽院の教員によれば、アメリカではほとんどの音楽大学がオンライン授業で実施されているという。アメリカと日本では、特に音楽大学のレッスンにおける学生たちの学びの質が、どうも違うようなのだ。簡単に言えば、アメリカの学生は自律的な学習ができていて、教員の方はアドヴァイスに徹しているようなのである。日本のように、手取り足取りの実技指導ではなさそうなのである。この点については、また別の所で詳しく考察してみたいと思う。

3. 学習と「学びを止めない」

日本ではコロナウイルスの感染がまだ本格化していない昨年3月から、全国の小・中・高等学校が臨時休校した。6月はじめにはほとんどの学校が再開したが、3~4か月に渡って学校教育が停止してしまったことの影響は図り知れない。危機感を抱いた文部科学省は全国の学校に、「学びを止めない」のスローガンのもと、「GIGAスクール構想」(ICTの活用により全ての子供たちの学びを保障できる環境)を継続・発展させる形で、遠隔授業を推奨した。経済産業省も「学びを止めない未来の教室」を銘打って、学校のICT推進を加速させている。

かつては遠隔授業の定番は通信教育で、それは学習の場が地理的に遠く、学習時間帯に労働しているということを補うための教育であった。しかし今求められているのは、人と人の物理的な接触を避けるために、意図的に物理的な距離を確保するための手段として、ICTを活用することである。英語ではさまざまな呼び方があるが、remote education、on-line education ほか、distance education あるいは distance learning などの言い方もある。ここで「ソーシャル・ディスタンス」を連想してしまうが、これは本来なら「フィジカル・ディスタンス」である。ちなみに「ソーシャル・ディスタンス」は人や集団の心理的な距離で、格差や差別と通底している。コロナ・パンデミックの社会で差別や格差が問題となる背景でもある。

日本で今行われているICTを活用した遠隔授業には、2つの形態がある。授業をリアルタイムで配

信する方法と、オンデマンド方式といって、受講者が好きな時間に授業を受けられるもので、その場合、a.パワーポイントと動画をセットにした授業を配信する場合と、b.資料だけをネット上にアップして教科書を読むように学習をして課題レポートを提出という、2つである。

の場合は、学校の時間割に合わせて家庭で学習することになるので、普通の授業とはあまり変わりはないだろう。しかしの場合は、学習者自身が学習の時間帯や長さを決められるので、学習者のメリットは大きいであろう。また何度も繰り返して授業を再生することができるので、対面での授業だったら、理解できずにそのままにしておいたり、聞き逃したり、聞き流したりしてしまったことも、復習できるだろう。

しかし「学びを止めない」ためには、さまざまな課題があるように思う。確かに「教育」は継続しているが、一人ひとりの「学び」はきちんと継続しているかどうか、問われるからだ。別の見方をすれば、現在、大学が行っている遠隔授業は、従来、放送大学等で実施されている成人教育と同じであって、大学生にも、成人と同じような学習態度や学習認知が必要ではないかと、考えてしまうのである。

日本の大学生は、学習においては受け身であることが多く、ある意味で「子どもの学び」、つまり高等学校までの学びの延長でしかなかった。しかし遠隔授業では「成人学習の学び」へと、一步踏み入れたのではないだろうか。こうなると、大学生にも「自律」した学習態度が求められるわけである。これはまた生涯学習における学びであり、自己を変容していく「変容学習」でもある。大学での遠隔授業の拡大は、学校教育と成人教育のバイパスとなり、大学生には社会人として自律した学習者であることが、求められることになるであろう。

4. 生涯と「メント・モリ」

自粛生活を余儀なくされている期間の間に、この人はこの危機をどのように思っているのだろうかと考えていた人がいた。その人というのは、『ライフ・シフト 100年時代の人生戦略』(2016年)の著者であるリンド・グラットンとアンドリュー・スコットの両氏である⁽²⁾。今回の連載のタイトルも、このふたりの著書にヒントを得ている。

そう思っているや、『コロナ後の世界』と題する新書が7月末に刊行され、ここにグラットン氏の「ロックダウンで生まれた新しい働き方」と題された一章が掲載されていた。

筆者が話を聞きたいと思った理由は、簡単であるし、読者の方にも容易に想像できるだろう。ここ数年、わが国でも「人生100年時代」が標語になって、年金問題や老後の資産形成などの課題が喧しく論じられてきた矢先に、コロナ・パンデミックを前にして、喧騒はどこ吹く風と言わんばかりに消えてしまったからである。

グラットンは「これを社会を良い方向に向かわせる積極的な機会だと捉える」べきだとして、第2次世界大戦後の荒廃から回復した親世代を見習うべきだと言う。そしてポスト・コロナの人生100年時代には、これまで主張してきた「無形資産」(お金では買えない資産で、信頼、友情など)に加えて、「透明性」、「共同創造」、「忍耐力」、「平静さ」という4つの要素を挙げている。「透明性」とは政府や企業の情報公開であり、「共同創造」とは人々が議論に参加することであり、「忍耐力」と「平静さ」はロックダ

ウンや自粛生活に必要な要素なわけだ。「パンデミックから多くを学び、私たち全員が変わらなければならない時が、すぐそこに来ています。」と述べ、文章を終えている。

特段新しいことを述べているわけではないが、コロナ・パンデミックという「禍」が通り過ぎるのを待つという受け身の姿勢でないことは確かだ。我が国ではどうも受け身の姿勢が顕著なような気がする。英語に「muddle through」という表現がある。「どうにか切り抜ける」という意味だ。muddle はマドラーのことで、コップに水と粉を入れてマドラーでかき混ぜても、しばらくすると、粉は沈殿して水は澄んでくる。これよろしく、混乱はあってもしばらくすれば落ち着くだろうと思ってやり過ごすことだ。一方で、「これを機に」これまでやってきたことを辞めるといふ人も多いだろう。「これを機に」新しいことをはじめれば「禍転じて福」となり、新しい人生も開けるのであろう。



M.ヴォルゲムート作『死の舞踏』(1493年)

我々は否が応でも死を想わざるえないのではないだろうか。詩人の藤原新也は、詩集『メメント・モリ』でこう語る⁽³⁾。「本当の死が見えないと本当の生も生きられない。等身大の実物の生活をするためには、等身大の実物の生死を感じる意識をたかめなくてはならない。」「メメント・モリ」とは、ローマ時代のラテン語の言葉だそう。凱旋する将軍に対して、「今は絶頂にあるがいつ死ぬかわかりませんよ」という戒めの言葉であり、また庶民に対しては、だからこそ「今生きているうちに大いに楽しみなさい」ということだったらしい。しかし14世紀のペストパンデミックによって約30%（地域によっては80%）を死亡したというヨーロッパでは、現生の生死ではなく、死後の世界(天国と地獄)へと、その後は目が向けられるようになった。ならば人は新しい生を生き抜くためには、新しい環境に適応し、そのためにも自ら学び続けるしかないのだろうか。進化論でいう「適者生存」である。

しかしよくよく考えてみるに、これは急場しのぎでなるようになったというだけの話で、これから5年後、あるいは10年後の自分のあるべき姿を求めて、継続して学習するには、よほど覚悟がいるように思う。キャリアをデザインしても、デザインしたものが数年で書き直しをしなくてはいけないことが周知だからである。だから「想定外のことを最大限に活用する」ために、「偶然を計画に入れておくこと」を、J.D.クランボルツ/A.S.レヴィンは提唱するわけだ⁽⁴⁾。だがここまできると、計画してもしなくても、同じになると思うのだが。

【参考文献】

- (1) 大澤真幸 コロナ時代の哲学 左右社 2020年
- (2) リンド・グラットンとアンドリュー・スコット『ライフ・シフト 100年時代の人生戦略』(2016年)、池村千秋・訳、東京経済新報社
- (3) 藤原新也 詩集『メメント・モリ』、朝日新聞出版 2018年、p.6
- (4) J.D.クランボルツ/A.S.レヴィン その幸運は偶然ではないんです！(花田光代ほか・訳) ダイヤモンド社 2005年